

アモス書三章一節～四章三節に見る

文学構造とその特徴について

油 井 義 昭

I 序

アモス書は十二小預言書の第三番目の書である。アモスは北王国イスラエルの預言者ホセアと同時代の預言者であり、アモスは最初の記述預言者となった。アモスは南王国ユダの市民であったが、北王国に対する預言の任務に就いた。アモスとホセアは同時代の同じ状況で活動したにもかかわらず、全く異なる個性の持ち主である。ホセアとアモスは前八世紀後半の北王国で二つの異なる洞察を与える。ホセアの使信は神の愛であるが、アモスの使信の中心は神の公正と正義である。アモスはイスラエルの信仰の社会的意味をより明確に理解した。アモスはエルサレムの南方十七キロのテコアの出身で「牧者」(一・一)であり、いちじく桑の栽培者(七・一四)であった。彼の北王国の腐敗した都市文化を批判する力は、この荒野での牧羊者生活の賜物と見ることができる。彼は荒野の沈黙の中で神の御声に接したに違いない。アモスとは「重荷」とい

う意味であるが、これがアモス書全体に、そして三章一節～四章三節にどのように表されているかを見たい。この小論で、アモスの語る預言者召命の言葉がどのような文学構造にたっていて、どのような特徴を備えているか、そしてどのような使信、神学的課題を与えられているかを見ることにしたい。三章一節～四章三節がどのような文体、用語、直喩、抑揚などになっているかを見ることにしたい。

Ⅱ 本文の文脈上の位置

アモス書一章、二章で、アモスは神の諸国民への譴責を述べた。諸国民への譴責の終わりにユダとイスラエルを加えた。三章から五章まで、アモスはイスラエルに特別な使信を伝えようとする。アモスは三つの説教を「このことばを聞け」という定型句をもって、それぞれ始めている(三・一、四・一、五・一)。しかし三章一節～四章三節をひとつのまとまった使信とも見ることが出来る。

三・一～二 審判の必然性

三・三～八 預言の根拠

三・九～四・三 富裕階級の絶滅

Ⅲ 言語の内容についての解釈

A 三・一～四・三の散文・詩文の言語の内容

一 三・一～二 審判の必然性 一節が散文、二節が詩文となっている。

(一) 三章一節

וְיִשְׂרָאֵל יֹאמַר (聞け。イスラエルの子らよ。)。これは、預言的発言の定型句であり、申命記六章四節のシエマ「聞きなさい。イスラエル…」を思い出させる言葉である。イスラエルの宗教はシエマ(聞け)から始まる。LXXはבית(家)とするが、本文の方が良い。一節で預言の使信が「主」から「わたし」に変わる。イスラエルの国民のアイデンティティは「エジプトの地から主が連れ上った」出エジプトの出来事と密接にかかわる。一節は「聞け。この言葉を」で始まり、その言葉についての詳細説明をする。次に「あなたがた」の上に①「イスラエルの子らよ」②「エジプトの地から連れ上った」③「すべての国民」と宛先の拡張がある。④以下は拡張された呼びかけである①。

(二) 三章二節

וְיִשְׂרָאֵל יֹאמַר「ただゝのみ」は最初のところを強調する。וְיִשְׂרָאֵל「あなたがたを」を動詞より前に置いて強調する。וְיִשְׂרָאֵל「知った」「選んだ」。この言葉は、神の選びの根拠の上に神がイスラエルと結んだ契約に言及する。H・B・ハフモン(Huffman)は国際条約における「ヤーダー」の同族語の使用を示し、「契約は、特に申命記の中の契約は、神学的に大国と小国の契約に類似している(申七・六～八)。それでNASB、NIV「新改訳」は「選んだ」と訳した②。選民には罰を免れる特権はない。むしろ責任、義務がある。

וְיָשׁוּבָה (これは律法の規範からの歪曲、逸脱の罪を表す。選びには倫理的要求がある。主とイスラエルとの契約から主がイスラエルに倫理的要求をされた点において主は他の神々と異なっておられた。^③)

二節の後半は、イスラエルの当時の人が考えていたことと異なる。וְיָשׁוּבָה (それゆえ) という接続詞はイスラエルの特権(原因)と「それゆえ」の後の責任(結果)を繋ぐ。二節前半は神の使命遂行のために我が民を選ばれたという信仰はイスラエル人の信仰の中核であった。しかしアモスは当時の人々の「選び症候群」に反対する。人々は自分たちが神の選民だから神は自分たちの不従順を見過ごされると信じていた。預言者は選びの特権は、神のえこひいきと懲罰の免除と勘違いしてはならない。逆に選ばれたということは、神の審きと懲罰がより厳しくなることを意味すると語った。このように二節には審きの理由(選んだから罰する)と審きの宣言がある(アモス二・九～一六と比較せよ)^④。

二 三・三～八 預言の根拠

次のペリコーペ(短章句)は普通の経験と周知の経験的現象から引き出された類似を特徴とした一連の修辭的疑問文である。^⑤アモスは、宣べ伝える使信のために、イスラエル人の耳目を引くために、使信の出所、源泉を劇的に語った。そのために、一つ一つ聴衆がうなづかざるを得ない七つのたとえを、修辭学的な疑問文の形で語った。そしてなぜ自分が預言者として神の召命を受けたか、使信を受けたかという核心に迫るという語り方をしている。^⑥

(一) 三章三節

וְיָשׁוּבָה「～でなければ」。最初の四行(三～五節前半)の構文がוְיָשׁוּבָהとוְיָשׁוּבָהを交互に用いることによって緻密に構成されている。וְיָשׁוּבָהは「もし」のニファル完了(「集まる、出会う」)である。LXXはこれを「もし」のニフ

アルの^ḥと読み替える（「互いに良く知っている」）。他のギリシャ語訳はマソラ本文と一致する。本節は主とその民との関係を意味する。^⑦

（二） 三章四節

^ḥは疑問詞^ḥと^ḥのカル未完了（「吠える」）である。^ḥ BHSはおそらく並行法を考慮してか、付加と見る。四節前半との関連で四節後半を理解すれば、獅子は獲物にありついた時には吠えるが、そうでない時には吠えないということであろう。そうだとすると、四節後半の本文は「獲物にありついた獅子であればこそ、洞穴で吠えるものだ」ということを言っているのであって、言外に言われていることは「獲物をねらう獅子は、寝床で吠えたりなぞしない」ということである。四節前半が場所の特定（森の中で）をしていることから、ここを付加と見る必要はない。シリヤ語訳はマソラ本文に一致している。^⑧

（三） 三章五節

^ḥ LX Xには^ḥに相当する訳語がない。シリヤ語訳には五節で二度も「わな」を伝える。^ḥは「引き金、投石器、餌、わなそのもの」などと訳す。おそらく鳥網の可動部分で、罠にかかった獲物を地面に固定された部分に押しつける働きをする。^ḥは^ḥと^ḥのカル不定形独立形「（餌を）つかまえる」。^ḥは^ḥの未完了。^ḥが未完了と不定形独立形の間に入っていて、否定の動作を強め、継続を示す。

（四） 三章六節

^ḥ「もし、くか否か」、ここは^ḥと同じで否定の答えを期待している。^ḥ疑問文から調整の^ḥへの変化は獅子と鳥から町の災害への焦点の変化をもたらす。今やイスラエルの民にとっての危険性は、より明白になる。^ḥは^ḥのカル未完了（「ふるえる、恐れる」）である。本節の前半はまず原因、次に結果、後半はまず結果、次に原因の順序になっている。

(五) 三章七節

𐤒はここでは「しかし」である。𐤒𐤓𐤕𐤔 (主ヤハウエ) では𐤒𐤓の母音符号に注意したい (三・一では𐤒𐤓)。ユダヤ人は𐤒は普通アドナイと読むが、その時は𐤒の母音符号とし、本節のようにアドナイが二重になる時はエロヒーム「神」と読む𐤒𐤓𐤕の母音符号に近づけて𐤒𐤓とした。𐤓𐤕は否定のあとで「く以外には、くせずには」の意味である。𐤓𐤕は𐤓 (秘密の会議、議論、計画) と接尾辞。本節は前節までのまとまった思想から隔たっている。預言者を外から見ている。預言者の名誉回復をはかっている。またこの段落の様式的な枠からはずれている。そこでBHSは七節全体を後世加筆 (付加) と見る。¹⁰⁾

しかし七節の率直な「散文」の宣言は三・六節の七つの詩的疑問の中で劇的に述べられた問題を明白にして、それを原則において一般化している。七節は又、八節のコンビネーション宣言―疑問の形式への効果的な移行を提供している。この個所の一部 (七節) を真正でないとして切除する何等の根拠もない。¹¹⁾

(六) 三章八節

𐤒𐤓𐤕𐤔「獅子が吠える」。初めに名詞、次に動詞が来る。これは条件文で状況を示すと考えられる。八節をBHSは後世の付加と見るものが多いとしている。しかし、三節から始まったアモスのことばは、八節において頂点に達しているのではないか。人々は救済願望と救済預言とを論拠として、アモスが主の預言者として立ち、また審きの威嚇を神の言葉として語ることに異議を唱えた。アモスが準拠するのは、自明な、論議の対象にもならない必然である。彼が神の言葉の上に立つ主なのではなく、主が語るときに彼が宣べ伝えねばならなかったのである。¹²⁾

(一) 三章九節

三章一〇節

(三) 三章一節

7

るかという、聞く耳ある人々に対して、また修辭學上のためである。

(二) 三章一四節

a、¹⁴ BHSはこの部分を付加と見るが、説得的でない。¹⁵の部分「罰する」の目的語であり、本来的な構成要素と見るべきである。¹⁶ BHSは後代の付加とするが、ベテルの祭儀は北王国にとって重要なものであり、その宗教的歪曲はアモスにとって審きの対象であった。「祭壇の角」の破壊はイスラエル宗教への最大の打撃である。祭壇の角は罪人の避け所なので（I列王一・五〇）、それが地に落ちるとは、重極罪なので、主御自身がその避け所を破壊されたのである。

(三) 三章一五節

¹⁷ は¹⁸のヒフィル形「打つ」の一人称単数ヴァーヴ継続法完了形である。¹⁹ (²⁰) は「多くの」と「大きな」の両方の意味がある。

六 四・一―三 上流階級批判

このベリコーペ（短章句）では、サマリヤの高慢な女性を攻撃する託宣である。この託宣は申命記三二・一三以下のたとえ話に基づいている。肥った家畜が主人に反逆すると、権利の剥奪と破滅によって罰せられる。

(一) 四章一節

²¹（聞け）は二人称複数男性であつて、続く複数女性の「バシヤンの雌牛たちよ」にはそぐわない。脈絡にそわせるなら²²となるところである。でもこれは預言の初めの定型句であり、サマリヤの上流婦人について三人称で語っているので、差し支えない。²³ BHSは接尾辭²⁴（彼女らの）と提案する。²⁵は

B 三章一節～四章三節の私訳

三章

- 1 イスラエルの子らよ。主があなたがた、すなわち、わたしがエジプトの地から導き上らせたすべての国民について語られた、この言葉を聞け。
- 2 わたしは、地上の全部族の中から、あなたがただけを選んだ。それゆえに、わたしはあなたがたのもろもろの咎のため、あなたがたを罰する。
- 3 もし二人が出会わなければ、一緒に歩くだろうか。
- 4 獅子は獲物がないのに、森で吠えるだろうか。
- 5 若獅子は獲物を捕らえないのに、穴から叫ぶだろうか。
- 6 鳥はわながないのに、地のわなにかかるだろうか。
- 7 わなは獲物がかからないのに、地から跳ね上がるだろうか。
- 8 町で角笛が吹かれたら、民は恐れ震えないだろうか。
- 9 町に災いが起これば、それは主がなされたことではないか。
- 10 なぜなら、神である主は、その計画を、しもべなる預言者に示さないでは、何事もなさない。
- 11 獅子が吠える。誰が恐れないでいられよう。
- 12 神である主が語られる。誰が預言しないでいられよう。

9 アシウドデの宮殿と、エジプトの地の宮殿に宣べて言え。

10 サマリヤの山々の上に集まり、そのうちの大騒ぎと、その中の圧制を見よ。
彼らは正義を行うことを知らない。

主の御告げ。

11 彼らは宮殿で暴虐と乱暴を積み重ねている。

それゆえ、神なる主はこう言われる。敵がこの地をぐるりと囲み、あなたの要害を倒し、宮殿を略奪する。

12 主はこう言われる。

羊飼いが、獅子の口から二本の足あるいは耳の一部を取り返すように、サマリヤに住むイスラエルの子らは、寝台の隅や絹地の長椅子を取り返される。

13 聞け、ヤコブの家に証言せよ。

神である主、万軍の神の御告げ。

14 まことに、イスラエルの反逆の罪を罰する日にベテルの祭壇を罰する。

祭壇の角は切り倒され、地に落ちる。

15 わたしは冬の家と夏の家を打つ。

象牙の家々は滅び、大きな家々は消え失せる。

主の御告げ。

四章

1 聞け。この言葉を。

サマリヤの山々にいるバシヤンの雌牛ども。

彼女らは弱い者をしいたげ、貧しい者を圧迫し、その主人に向かつて「持ってきてよ。そうしたら飲むから」と言う。

2 神である主は、御自身の聖にかけて誓われた。

まことに、見よ。その日があなたがたの上に来る。

その日、彼らは、あなたがたを肉鉤で引き上げ、

あなたがたの残りの者を魚捕りのとげで引いて行く。

3 あなたがたは、おのおの、まっすぐに城壁の破れた所を出て、ヘルモンの方へ追いやられる。
主の御告げ。

C アモス書三章一節～四章三節の言語の内容

一 三・一～二 審判の必然性

一節と二節は預言的宣言全体の序論と主要な思想を含む。一節はアモスにとってイスラエルの全家に属する者への使信、宣言の導入である。「この言葉を聞け」は聴くことの召喚の導入の定型句（創四・二三、申四・一など）で、重要な使信が来ることを示す。出エジプトの解放はイスラエルと主との契約関係をもたらし、^②使信は契約に基づき、預言者の宣言は契約の様式において歴史的連続と見られる（申四・二五～三二）。

二節の神の言葉は審きの言葉の構造を持っている。前半は主の意図の続く宣告の根拠となる主張である。
①あなたがたとわたしは独特な契約で結ばれている。②契約の条件によって従うことがあなた方の責任である。従わないなら、あなたがたを罰することがわたしの責任である。③したがってわたしはあなたがたの罪

の故にあなたがたを罰する。これはアモスの時代の平均的イスラエル人が理解しなかった概念である（アモス五・一八―二〇参照）²¹。

二 三・三―八 預言の根拠

三節から八節は、なぜ自分が預言者として神の召命を受けたのかを明らかにし、色々な例をあげながら核心に迫るといふ表現方法を取る。その中で七節は預言者と主の一体性を強調するが、通常は付加と見なされる。七節で重要なことは主は預言者に秘密を明らかにせずといかなる行為もしないという点である。もしこの節が付加なら、それを挿入した者は三―五節と六節（そして八節も）とを十分に理解していない。七節の言明は、アモスが語ることなしには、災いが起こっても、それが神の行為であることが人々には分からないのだという点を鋭くさせるものである。八節の預言と主との深い結び付きに移行するために、七節はなくてはならない構成要素と思われる。すでに疑問詞「何」によって質問は五回繰り返されており、六節ではひとつの転調があったと思われる。六節では疑問詞「何」が「何」に変わる。ここでは疑問は原因から結果に変わる。これが次の節に影響を及ぼす²²。

町で角笛が吹かれたら、民は恐れ震えないだろうか。

六節 a

町に災いが起これば、それは主がなされたことではないか。

六節 b

なぜなら、神である主は何事もなさらない。

七節 a

その計画を、しもべなる預言者たちに示さないでは。

七節 b

このように理解（翻訳）することによって、それまで浮き上がっていた七節は初めて脈絡にフィットする。三―五節までの構成に見られるのは、原因と結果の単なる羅列ではない。むしろ、それは、事象と条件との

緊密な一体性であり、とりわけ事象に対する条件の拘束力であった。五回の質問に対し、七節はいわばこれらの構成の秘密を明らかにする。七節をまっけて、はじめて、三、六節の構成はその意義を獲得するのである。八節は、今や七節で明らかになった預言の秘密を堂々と述べる。八節の「獅子」とは主であり、四節に「獅子」を取り上げたことと無関係ではない（一・二a参照）。「誰が恐れないか」あるいは「恐れない者は誰か」とは神の言葉を受け取らない民への威嚇である。八節bは預言の拘束力、必然性、そして神と預言（者）の一体性を強調する。²³

三節から八節は大体が因果関係で結ばれている。それは次の通りである。

三節「もし二人が出会わなければ、一緒に歩くだろうか。」交わりの原因は一致である。

四節「獅子は獲物がないのに、森で吠えるだろうか。」獅子が吠えていることは獲物を証明している。「若獅子は獲物を捕らえないのに、穴から叫ぶだろうか。」若獅子の叫びは、捕らえ所有する獲物という原因があるからである。

五節「鳥はわながないのに、地のわなにかかるだろうか。」鳥が落ちる原因はわなである。「わなは獲物がかららないのに、地から跳ね上がるだろうか。」わなが跳ね上がるのは、捕まった鳥が原因である。

六節「町で角笛が吹かれたら、民は恐れ震えないだろうか。」角笛は警戒と驚きがある証拠である。「町に災いが起これば、それは主がなされたことではないか。」町の災い（結果）は主を証明する（主がいる証拠・原因）。

七節「なぜなら、神である主は、その計画をしもべなる預言者に示さないでは、何事もなさない。」主は預言者に示して（原因）、事を行う（結果）。

八節「獅子が吠える。だれが恐れないでいられよう。神である主が語られた。だれが預言しないでいられ

よう。」七節の原則からアモスは適用を見つける。主（獅子）が吠えた（原因）―だから恐れよ（結果）。主が語られた（原因）―だから預言せよ（結果）。

三 三・九―一一 暴虐に伴う審判の必然性

ここでアモスは首都に、あるいはサマリヤの支配階級に向かって審きを宣告する。

九節 アシユドデとエジプトは主の裁判に召されイスラエルへの審きの証人となる。サマリヤの支配階級は大きな騒ぎと圧迫を引き起こし、正義を行わず、庶民を収奪して富を蓄えている。

一〇節 町はあらゆる暴力の犠牲になる。サマリヤは正義（צדק）の感覚を失った。富が宮殿に蓄えられる。それは暴虐と暴行の実である。צדקとצדקは暴行と残忍な行為である。

一一節 刑罰の時サマリヤの支配階級には保護がない。敵に包囲され、宝物は侵入軍にとられる。²⁴

四 三・一二 イスラエルの死の証人

一二節は格言の形で、イスラエルの破滅を述べる。羊飼いが羊の群れの番をしていた時、獅子の襲撃を受けた時、証拠があれば償わなくてもよいが、証拠品がなければ、賠償しなければならない（出二二・九―一二の規定）。野獣に襲われた羊の場合には、残された両足や片耳でも証拠品として役立つが、長椅子の隅や寝台の一部は殆ど何の役にも立たない。それは救いの徴ではなく、完全な滅びを示す。²⁵

五 三・一三―一五 ヤコブの家の滅亡

一三節「ヤコブの家」はサマリヤ人に向かって契約の民としてのルーツを示し、現在の墮落を示す。聞く

者たちは主が二三、一五節の話し手であることを二度思い起こされる（一二節と一五節）。ここではアモス書の他に出てこない「神である主、万軍の神の御告げ」という称号が使われる。これは全能と威厳を示す神名である。

一四節は主への反逆と偶像崇拜が刑罰の理由であると告げる。刑罰の日にベテルの祭壇が破壊され、祭壇の四隅の角は折られる。主は神殿と大邸宅を打つ。神殿は宗教生活の中心である。大邸宅は支配階級が搾取で建てた贅沢の象徴である。実際のキャッチワードは「家」である。ヤコブの家、神の家（ベテ・エル）、冬の家、夏の家、象牙の家、大きな家々であり、家の荒廃はイスラエルの宗教と文化への審きである。

一五節は王を含む富裕な者たちの家が破壊されることを告げる。𐤒𐤍𐤕𐤍𐤕を新改訳は「多くの家々」と訳すが、ヘブル語の𐤒𐤍𐤕𐤍𐤕は「大きな」をも意味するので「大きな家々」とか「大邸宅」の翻訳の方が「象牙の家々」との並行の故に好ましい。

六 四・一―三 上流階級批判

この個所でアモスは上流階級の女たちを断罪する。貧しい者たちを圧迫することによって可能となった贅沢な生計の故に断罪される。

一節 「バシヤン」はヨルダン川の北東部の高原地域、家畜とその乳製品の産地として知られて見事な家畜で有名。肥沃な台地と山脈より成る一、五〇〇メートルの高さのハウラン山とかバシヤンの山、ヘルモン山が北の境を形づくる。^②

二節 主は御自身の聖さのゆえに審判を預言される。上流婦人は鉤で立派な邸宅から連れ出され、最後の一人は「魚捕りのとげ」で引き出されるであらう。

三節 婦人達はあとからあとから繋がって捕虜として連れ出される。「城壁の破れ口」を通り抜けて連れで行かれる（エゼ一二・三、七参照）。イスラエル捕囚民は北に向かつて連行される光景を思い浮かべることが出来る。三節の最後の言葉は方位格で地名のようである。しかし「ハルモン」とマソラ本文にある語（新改訳も）は未知の場所である。色々な訳は推量である。大抵のものは母音を変えて「ヘルモン」と修正して読む。訳文は「ヘルモンの方に向けて投げ捨てられる」となる。もしもこれが正しければ、ヘルモンはこの詩行に皮肉なひねりを与える。何故ならヘルモン山はバシャン山脈の中にあるからである。バシャンの雌牛がバシヤンの山々の中で死肉（腐肉）として終わる！^{②⑦}またヘルモンのヘレムは「聖絶」という意味の言葉も含まかもしれない。LXX以外のギリシャ語訳は「彼らはヘルモンの方向に移送される」と訳す。

IV アモス書三章一節～四章三節の文学形態的分析

A 韻律の区分

アモス書三・一～四・三のうち、三・二、三～六、八、一二、一四～一五、四・一～三は詩文であるが、その他の散文にも詩の韻律がある。韻律は次のようになっている。

וְהָיָה כִּי יִשְׁמַע הָעָם אֶת הָאֵלֹהִים וְיָשׁוּבִים יִהְיוּ אֶל־יְהוָה וְיִשְׁמְעוּ אֶת הָאֵלֹהִים וְיָשׁוּבִים יִהְיוּ אֶל־יְהוָה	3:1	一（四・三）
וְהָיָה כִּי יִשְׁמַע הָעָם אֶת הָאֵלֹהִים וְיָשׁוּבִים יִהְיוּ אֶל־יְהוָה וְיִשְׁמְעוּ אֶת הָאֵלֹהִים וְיָשׁוּבִים יִהְיוּ אֶל־יְהוָה		（五・五）
וְהָיָה כִּי יִשְׁמַע הָעָם אֶת הָאֵלֹהִים וְיָשׁוּבִים יִהְיוּ אֶל־יְהוָה וְיִשְׁמְעוּ אֶת הָאֵלֹהִים וְיָשׁוּבִים יִהְיוּ אֶל־יְהוָה	2	一一（三・三）
וְהָיָה כִּי יִשְׁמַע הָעָם אֶת הָאֵלֹהִים וְיָשׁוּבִים יִהְיוּ אֶל־יְהוָה וְיִשְׁמְעוּ אֶת הָאֵלֹהִים וְיָשׁוּבִים יִהְיוּ אֶל־יְהוָה		（三・三）

3 <u>חָלַקְנוּ שְׁנֵים חֲדָרִים בְּחֵדָה בְּלִילֵי אֲבִירָתָם:</u>	三 (11・11)
4 <u>חָשַׁאֲנִי אִירָתִי בַּיָּעַר וַחֲרָרְךָ אֵין לִי:</u>	四 (11・11)
5 <u>חָתַן בָּפֶרֶד קִרְלִי מִמֶּנְעוּלִי בְּחֵדָה אֲבִירָתִי:</u>	五 (11・11)
6 <u>חָתַל צִפּוֹר עַל־פֶּחַח חֲאָרִין וּמִלְּקֶשֶׁת אֵין לָהּ:</u>	六 (11・11)
7 <u>חָתַל צִפּוֹר מִן־חֲאָרָתָהּ וְלִכּוֹד לֹא יִקְרָה:</u>	七 (11・11)
8 <u>חָתַל צִפּוֹר מִן־חֲאָרָתָהּ וְלִכּוֹד לֹא יִקְרָה:</u>	八 (11・11)
9 <u>חָתַל צִפּוֹר מִן־חֲאָרָתָהּ וְלִכּוֹד לֹא יִקְרָה:</u>	九 (11・11)
10 <u>חָתַל צִפּוֹר מִן־חֲאָרָתָהּ וְלִכּוֹד לֹא יִקְרָה:</u>	十 (11・11)
11 <u>חָתַל צִפּוֹר מִן־חֲאָרָתָהּ וְלִכּוֹד לֹא יִקְרָה:</u>	十一 (11・11)
12 <u>חָתַל צִפּוֹר מִן־חֲאָרָתָהּ וְלִכּוֹד לֹא יִקְרָה:</u>	十二 (11・11)

שחז' קרעם או ברל-און

(11・11)

כן יצא'ו בני ישרא'ל

(11・11)

והשבים' בשמחון בפאת משה וברמזמן קרש':

(11・11・11)

שמעו' וקעידו' בקרב' נאם-אונ' יורה אליו' המלואה:

111 (五・11・11)

14 כי ביום פקד' פשע-ישראל עליו

111 (11・111)

ופקדתי' על-מנופוחות בות-אל

(11・111)

ונקדעו' קרנות המנופוח' ונפחו' לארץ:

(11・111)

15 והפדו' בדת-חל'ו' על-פדות חמור

111 (11・111)

ואבדו' בדת' חל'ו' וקפו' פתים רבים

(11・111)

נאם יורה: ס

(11)

4:1 שמעו' חורב' חל'ו' פדות חפשו' אשר פדו' שמחון

111・111 (11・111・111)

העשקות' חל'ים הרצאות' אבות'ים

(11・111)

האמרת' לארצ'ותם' חפאו' ונשחה:

(11・111)

2 נשבע' אונ' יורה' בקדש' פי' חנה' ימים ביום' על-לכם

111 (五・四)

ונש' אחרכם' בנצח'ות ואחר-יכן' בפרדות' ונחה:

(111・111)

3 ופר'אים' חל'ואה' אשר' נגד'ה' והשליכת'ה' חסר-מורה

111 (11・111・111)

נאם יורה:

(11)

均衡のとれた二行連句や三行連句のいかなる律動も見出さない。いくつかの節は大抵散文である (三・一

○、一三、一四)。他は表面的には並行的散文や自由な韻律である。しかし各託宣は構造的均衡やその文章の多くで並行法を示す。三・一二では羊のからだの二つがサマリヤの美しい装飾品の二つに較べられる。三・九、四・三の韻律は高度に不規則である。詩文の支配的韻律は三・二型(三章三、四、六、七、一四節)でキーナー調で悲しみを表す哀歌調である。散文の三・四型、三・三型、三・二・三型、四・二型、四・三型、二・三型、二・二・二型、三・三・二型、二・二型は、それぞれ韻律的散文と言えそうである。この韻律の種々の変化に固定した解釈があるとは断言できないが、詩は勿論のこと、散文も詩の形をとることによって、リズムを伴い、預言者アモスの気分情緒と預言の言葉のテンポとパトスを良く表している。アモスは詩文、散文のスピーチにおいて感情的思想的起伏を適切な文学的技法によって見事に伝えているように見える。

B 並行法

(1) 一、二節「聞け…わたしは責任を問う」(A B)と二三、一四節「聞け…わたしが清算する時勘定を請求する」(A' B')は三章全体の包括的インクルジオの工夫がなされている。

(2) 二節は総合的並行法になっている。

わたしは地上の全部族の中からあなた方だけを選んだ(A)

それ故わたしはあなたがたのもろもろの咎のため、あなたがたを罰する(B)

(3) 三節は八節と共にインクルジオを形成する。

もし二人が出会わなければ、一緒に歩くだろうか。(三節 A)

神である主が語られる。誰が預言しないでいられよう（八節 A'）

(4) 四節の二詩行は同義的並行法（A B A' B'）になっている。

獅子は獲物がないのに（A）、森で吠えるだろうか（B）

若獅子は獲物がないのに（A'）穴から叫ぶだろうか（B'）

(5) 四節の「獅子が吠えた」と八節の「獅子が吠える」はキアスティック（交差並行法的）インクルジオである。

(6) 五節の二詩行は同義的並行法（A B A' B'）である。

鳥はわながないのに（A）、地のわなにかかるだろうか（B）

わなは獲物がかからないのに（A'）、地から跳ね上がるだろうか（B'）

(7) 五節は段階的並行法（A, A'）とも言える。

鳥はわなにかかる（A）、地に落ちる（A'）

(8) 六節の二詩行は同義的並行法である。

町で角笛が吹かれたら（A）、民は恐れ震えないだろうか（B）

町に災いが起これば（A'）、それは主がなされたことではないか（B'）

(9) 六節の後半と七節は交差並行法を作る。

町に災いが起これば（A）、それは主がなされたことではないか（B）

なぜなら神である主は何事もなさない（B'）、その計画をしもべなる預言者に示さないでは（A'）

(10) 八節は完全交互並行法である。

獅子が吠える（A）、だれが恐れないうでいられよう（B）

神である主が語られる(A')だれが預言しないでいられよう(B')
AとA'は肯定文であり、BとB'は修辭的疑問文である。

(11) 三〜八節全体は修辭的疑問文を用いながら、漸層法的(クライマクティック)並行法と見ることが出来るよう。

(12) 一〇節は下降の段階的並行法となっている(A、A')。

(13) 一一節は下降の段階的並行法となっている(A、A'A'')。

(14) 一〇節と一一節は総合的並行法を形成する。一〇節がA、一一節が「それゆえ」Bである。

(15) 一二節は比喩的並行法である。前句と後句は全く異なる現象を述べているようにも思われるが、そこには認識可能なある共通性が見出される。ここに働いているのは類比の論理である。⁽⁹⁾

(16) 一四節は下降の段階的並行法となっている(A、A'、A'')。

(17) 一五節は下降の段階的並行法となっている(A、A'、A'')。

(18) 一五節の一部は同義的並行法である。

象牙の家々は(A) 滅び(B)

大きな家々は(A') 消え失せる(B')

(19) 四章一節は上昇の段階的並行法である(A一、A二、A三、A四)。

(20) 四章二〜三節は下降の段階的並行法である(A一、A二、A三、A四、A五、A六)。

(21) 四章一〜三節を交差並行法的インクルジオと見ることも出来る(ABCDEF、D'C'B'A')。

聞け、この言葉を(A)

サマリヤの山にいるバシヤンの雌牛ども(B)

彼女らは弱い者をしいたげ (C)

貧しい者たちを圧迫する (D)

その主人たちに向かつて「持ってきてよ！そうしたら飲むから」と言う (E)

神である主はご自分の聖にかけて誓われた (F)

まことに、見よ。その日があなたがたの上に来る (E')

その日、彼らは、あなたがたを肉鉤で引き上げ (D')

あなたがたの残りの者を魚捕りのとげで引いて行く (C)

あなたがたはおのおの、まっすぐに城壁の破れた所を出て、ヘルモンの方へ追いやられる (B')

主の御告げ (A')

(22) 四章一―三節を総合的並行法と見ることもできる。一節がAで二節の「神である主は、ご自分の聖にかけて誓われた」を「したがって」にかわるものとし、残りをBとする。

同義的並行法、下降と上昇の段階的並行法、漸層法的並行法、総合的並行法、比喩的並行法、インクルジオを駆使して、神よりの託宣の使信、預言者の資格の弁護、そして聴衆への審判の使信を見事に表現している。

C 文体的特徴と文学的技巧

アモスは神に与えられた啓示を伝える時、多彩な作文上の技巧を駆使している。アモスが職業的に専門的に訓練された預言者でないとすると、このことは力強い心を動かす託宣を伝える能力を減じていない。アモ

スの伝えた託宣のインパクトは神に対して強情な国民の責任を胸にこたえさせた。

一 クライマックス（漸層法）の型の使用

アモスのクライマックスを作るための表現の技巧は見事で注目に価する。一章～二章で遠い國のことから近い國々のこと、そしてイスラエルよ、あなたも罪を犯しているのだというあの迫り方と同じ技巧を三章三～八節で用いている。三章三～八節でアモスの話しはクライマックスに向かっている。^⑪

二 修辭的疑問文の連鎖の技巧

三・三～六の中で七つの修辭的疑問文を使う。修辭的疑問文は基本的に答えを必要としない疑問文において聴衆の注意を喚起する技法であり、アモスはそれを効果的に使っている。^⑫

三 メッセンジャーク定型句の使用

「主は語られた」(三・一)、「主の御告げ」(三・一〇、一五、四・三)、「主は誓われた」(四・二、六・八、八・七)。

四 召喚定型句の使用

「この言葉を聞け」(三・一、四・一、五・一、八・四)。公式の宣言を聞くように民を集める布告者の機能を示唆する。

五 皮肉と比喩的表現

三・一二と四・一。三・一二は皮肉と比喩的表現が重なる。野獸に襲われた羊の残りの足や耳は役立つが、長椅子や寝台の一部は何の役にも立たない。四・一は直接的侮辱を含む「聞け：バシヤンの雌牛ども」。直喩は強い感情的付帶的意味を伝え、含蓄された価値判断を伝える。しばしば動物の直喩によって行われる。四・一は消極的比喩的表現である。^⑬

26

(二・三・八、一一、一二、一三、四・二) ④ 𐤒𐤓 (二・一四、一五で四回)

九 類音

① 𐤒𐤓𐤕 (三・九) と 𐤒𐤓𐤕 (三・一〇) ② 𐤒𐤓𐤕𐤓 と 𐤒𐤓𐤕𐤓 (二語とも四・一) 十 不変化詞の用法

三 a 𐤒 五 a 𐤒

b 𐤒𐤓𐤕 B 𐤒𐤓𐤕

四 a 𐤒 五 b 𐤒 A 𐤒

𐤒𐤓𐤕 B 𐤒𐤓𐤕

b 𐤒 六 a 𐤒𐤓𐤕 A 𐤒𐤓𐤕 ③

𐤒𐤓𐤕 B 𐤒𐤓𐤕

十一 キャッチワードの方法

① 六節の 𐤒𐤓𐤕 と七節の 𐤒𐤓𐤕 を比較。② 七節の 𐤒𐤓𐤕 は八節の 𐤒𐤓𐤕 と比較せよ。③ 七節の 𐤒𐤓𐤕 と八節の 𐤒𐤓𐤕 とが繋がる。④ 七節の 𐤒𐤓𐤕 と八節の 𐤒𐤓𐤕 が繋がる。⑤ 四節の 𐤒𐤓𐤕 と五節の 𐤒𐤓𐤕 とを比較。⑥ 五節 a の 𐤒 と五節 b の 𐤒 とを比較。⑦ 六節 a の 𐤒𐤓𐤕 と六節 b の 𐤒𐤓𐤕 とを比較。⑧ 四節の 𐤒𐤓𐤕 と八節の 𐤒𐤓𐤕 とを比較。⑨

V アモス書三章一節～四章三節の思想の流れ

A 三章一～二節。この個所はアモス書全体の中心的主題の一つを強調する。それは、イスラエルの脅威

とされた刑罰の背後にあるものに戻る。イスラエルの特別な地位とイスラエルが受けた好意の取り扱いはいはへブル聖書、特に初期の歴史全体の中心思想である。主はヤコブを選ばれ、イスラエルをエジプトの束縛から救われたので、献身的服従を要求する権利を持つ。それでその短所（罪）ゆえに厳しく裁かれる。³⁶

B 三章三―八節。一章―二章のイスラエル断罪の預言の更なる背景を提供する。三―八節は一章二節の吠える獅子と二章一―一二節のアモス自身の預言者としての役割を結び、アモスの預言者としての弁明書である。真の預言者は、結果にかかわらず、いかなる選択権もない。三―八節は二節の注釈となっている。二節は既に困惑させる、また、逆説的な謎である。「わたしはあなた方を選び出した。それゆえ、あなたがたを罰する」という二つの声明がどうして一つになるのか。普通は「わたしはあなたがたを選び出した。それゆえあなたがたを祝福し、救おう」となるはずである。三―八節の表象は二節で鳴った審きと破滅の基調音をこだます。

C 三章九―一一節。九節はアシウドデとエジプトをイスラエルの裁判に証人として召喚する。九節は使者の言葉の形を取った導入であり、一〇節の預言者の叱責の言葉の基盤をなす。一〇節に一一節の決定的な威嚇の言葉が続く。³⁷

D 三章一二節。アモスはここでも彼の審きの預言に対するイスラエルの救いを主張する反論に対して、再反論する。辛辣な皮肉をもってアモスもまた民族の「救い」について語る。しかしそれは救いにならざる救いである。家畜を飼う牧者が、食いちぎれた家畜の一部分を弁償免除のために「救う」ように、イスラエ

ルも審きにおいて「救い出される」と揶揄しつつ語る。アモスは民衆の俗信に真つ向から対決し、その迷妄を根源から打ち破る。

E 三章一三―一五節。アモスは物質的繁栄にあぐらをかいた生活が産み出す、首都サマリヤの特権階級の自己安心に對して、辛辣な皮肉をもって対決する。

F 四章一―三節。アモスはサマリヤの支配階級の高貴な婦人達を、「バシヤンの雌牛」と呼ぶ。それに続いて、貧しい同胞への無法な圧迫に對する厳しい非難の言葉を述べる。家長はたしなみのない夫人の度はずれた要求のため、夫人の顔色をうかがう。神はこの人たちを審き、利己的な婦人達は強制的に追い立てられ引かれて行く。⁸⁸

VI アモス書三章一節―四章三節の神学的課題

A アモス三章一―八節は、第一に、選びの民としてのイスラエルのアイデンティティを明らかにする。アモス一章―二章はイスラエルに迫りつつある恐ろしい破局の宣告をもってクライマックスに達していた。聴衆は、次に問いをもった。こうしたすべてのことが本当に我々に起こるのだろうか。つまるところ、我々は神の選びの民ではないか。

アモスはまず第一に、神の選びのことを述べる。しかし、彼はイスラエルの選びの中に、この民の他民族に對する特権を見ない。即ち、人々が罪を隠したり、審きに對して自己を保全する特権を認めない。選びは

絶対的な神の自由のわざである。神はイスラエルを自己の目的のために選んだのであって、民の人間的利害に拘束されることはない。むしろ神の選びによって、その崇高な意図を意義深く提示したのである。イスラエルは、選びを通して何らかの特別な神の保護を要求しえない。むしろ逆に、選びを通して、神はイスラエルに特別な服従を求めておられる。しかし民はその罪を十分深刻に受け取らず、神の恵みも真剣に受け取らない。民が神との関係を自己の要求の観点からのみ見るのに対し、アモスは神の観点に立つて、神と民との関係を判定する。こうして彼は民間の選民の教義とは正反対の結論に達する。神の意志はイスラエルの選びにおいて恵みの大きさを示したが、その同じ神の意志が審きにおいては神の峻厳を余すところなくあらわすものとなる³⁹⁾。

B アモス三章一―八節は、第二に、神に召された預言者としてのアイデンティティを明らかにする。民衆は「あなたは何者で、何の権威によってこのように語るのか」と問うた。預言者は聴衆に七つの修辭的な問いの連発を浴びせることから始める。七つのそれぞれの問いは、行為に対する反応、つまり原因に対して結果が不可避であることの認識を聴衆から引き出すように工夫されている。六節の問いでは「結果―原因」の順序が逆になっている。そして八節でクライマックスが来る。アモスが言ったのは、主が彼に語ったから、語ったことである。彼は召されていた。誰しも警報のかん高い音、もしくは、獅子の咆哮を聞いた途端、びっくり仰天して答える以外にすべがないように、彼もその他になすすべがなかったのである⁴⁰⁾。

C アモス三章一節から四章三節までの第三の神学的課題は神の聖と社会正義である。特に三章九節―四章三節までの箇所は神の貧者、弱者への関心を示している。ヤロブアムⅡ世の統治時代、北王国において貧

富の差は増大し、貧者は債務奴隷となっていた。また裁判の不正、上流社会の華美、おごりがひどかった。三章九～一〇節「彼らは正しいことを行うことを知らない。」搾取階層の後を顧みない贅沢な生活をアモスは描く。満腹した牛のように彼女たちは、その牧場である下層階級の民をいたずら半分に踏みつける。本当に彼女らの経済生活は彼らの労働の上に成り立っていた。^④貧しく力なき人々への関心がアモス書全体を貫いている。アモスは貧しい者たちを踏みつけたイスラエルを告発する。四章一～三節の言葉は、社会の寡婦やみなしごや貧しい人々に起こっていることへの責任が全住民の男性層ばかりでなく、上流階級の女性にもあることを明らかにし、有罪であり刑罰が告げられる。^④

神の審きは、人間の個々の罪に対する罰というより、むしろ神の神聖性の証明であり、貫徹である。神の聖とは、神に対立するあらゆる人間的力に対する優越と、抑圧された者を保護して御手のうちに憩わせようとする彼の意志と、生の秩序の絶対的な貫徹をその内容としている。

結 語

我々はアモス書三章一～四章三節の文学形態と文学的特色を見てきた。一～二章でテコア出身のアモスはイスラエルに出かけイスラエル弾劾の使信を語る。アモスは自分が預言者であることを弁明しなければならぬ立場におかれた。あなたはどのような権威のもとに我々にこのような審きの使信を語るのか。アモスは神の召命を受けた時、驚き、狼狽する。神の御声は獲物に飛びかかろうとする獅子の咆哮に較べられる。しかしながら誰も聞かず、誰も震えない。アモスの反応は恐怖ではなく、御声が宣言したものを伝える内的な強い促しであった。アモスは突然、神の使命を押しつけられ、圧倒される。アモスは託宣を受けてそれを宣言する。「神である主は、そのはかりごとをご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさらない

い。」これは源と權威の所在を突き止めている。恵みの主は、必ず預言者をもってあらかじめ警告しないでは何事もなさらない。そして自分はその選びにあたって、預言者となった。獅子の吠えるのを聞いて身震いして預言する。こうしてサマリヤの滅亡、ベテルの滅亡と、サマリヤの上流階級の女性への審判、滅亡、捕囚が預言される。

アモスは詩の部分と散文の部分においてキ―ナー調（三・二型）その他の韻律を駆使して審きの基調音を見事に作り上げ、多彩な詩的並行法の駆使、用語の巧みな選択、クライマックス（漸層法）的文体に修辭的疑問文を併用し、さらに獅子、鳥、羊、牛などの表象の駆使、皮肉や比喩など、様々な文学的技巧をほどこし、神のパトスと預言者のパトスとが一致して、力強いインパクトをもった使信、託宣、弁明を構成している。

預言者の權威と召しがどのようなものであるか、預言者の内的葛藤をこれほどまでにあらわしたものはない。アモスは職業的預言者集団の人脈には属していないが、神の超自然的な働きによって、神の使信を取り次ぐ。そして、生き生きと何故イスラエルが神の審きを受けなければならないかをイスラエルの支配者階級に語りかける。この三章一節―四章三節がアモス書全体の中心的個所であることを示しているように思われる。

注

① 鈴木祥一郎『原典購読アモス書』（東京・キリスト教図書出版社、一九八四年）五一頁。

② Thomas J. Finley, JOEL, AMOS, OBADIAH The Wycliffe Exegetical Commentary (Chicago: The Moody Bible Institute, 1990), pp. 180-181.

- ③ N・H・スネイス『旧約宗教の特質』浅野順一、林秀、新屋徳治訳（東京・日本基督教団出版部、一九六四年）一四七頁。
- ④ Thomas J. Finley, op. cit., p. 181.
- ⑤ Shalom M. Paul, A Commentary on the Book of Acts (Minneapolis: Fortress Press, 1991), p. 104.
- ⑥ クロード・A・リース「アモス書」『ウェスレアン聖書注解 旧約篇 イザヤ書―マラキ書 第四卷』（東京・イムマヌエル綜合伝道団 新教出版社、一九八九年）五二五頁。
- ⑦ 小林進『イスラエル預言文学の伝承と編集 アモス書の文献批判と解釈』（東京・聖公会出版、一九九四年）一四〇―一四二頁。
- ⑧ 小林進 前掲書 一四二頁。
- ⑨ Thomas J. Finley, op. cit., p. 183.
- ⑩ A・ヴァイザー『A T D 旧約聖書注解 十二小預言書上 ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書』（東京・A T D、N T D 聖書注解刊行会、一九八二年）二八六頁。
- ⑪ Douglas Stuart, Hosea-Jonah WORD BIBLICAL COMMENTARY vol. 31 (Waco, Texas: Word Books, Publisher, 1987), p. 325.
- ⑫ A・ヴァイザー 前掲書 二八五頁。
- ⑬ 小林進 前掲書 一四四頁。
- ⑭ Shalom M. Paul, op. cit., p. 118.
- ⑮ 日本基督教団出版部編『説教者のための聖書講解 釈義から説教へ 一二小預言書』（東京・日本基督教団出版局、一九九二年）一六六頁。

- ①⑨ E. Kautzsch ed. Gesenius' Hebrew Grammar (Oxford: At the Clarendon Press) p. 440.
- ①⑭ Hans Walter Wolff, A Commentary on the Books of the Prophets Joel and Amos trans. by Waldemar Jenzen, S. Dean McBride, Jr. and Charles A. Muench (Philadelphia: Fortress Press, 1977), p. 207.
- ①⑮ Thomas J. Finley, op. cit. p. 204.
- ①⑯ Ludwig Koehler and Walter Baumgartner, trans. M. E. J. Richardson The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament vol. I 1-7 (Leiden: E. J. Brill, 1994), p. 354.
- ②⑰ Douglas Stuart, op. cit., p. 321.
- ②⑱ Ibid., pp. 321-322.
- ②⑳ Hans Walter Wolff, op. cit., p. 183.
- ②㉑ 小林進 前掲書 三三六―三五七頁。
- ②㉒ R. Martin-Achard, God's People in Crisis International Theological Commentary A Commentary on the Book of Amos (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Pub. Co. 1984), p. 30.
- ②㉓ 日本基督教団出版局編 前掲書『説教者のための聖書講解 釈義から説教へ 一一小預言書』一六六頁。
- ②㉔ Yohanan Aharoni, The Land of the Bible: A Historical Geography trans. A. F. Rainey (Philadelphia: The Westminster Press 1979) pp. 37-38.
- ②㉕ James Luther Mays AMOS A Commentary (Philadelphia: The Westminster Press) p. 73.
- ②㉖ Douglas Stuart, op. cit., p. 333.
- ②㉗ Ibid., p. 329.
- ③① 勝村弘也「言語芸術作品としての旧約聖書―ヘブル詩におけるパラレリズムの問題を中心として」『理想』

一九八四年 No 六一九（東京・理想社 一九八四年）一二八頁。

③① Douglas Stuart, op. cit., p. 339.

③② Wilfred G. E. Watson, Classical Hebrew Poetry A Guide to its Techniques Journal for the Study of the Old Testament Series 26 (Sheffield: Department of Biblical Studies The University of Sheffield, 1984) pp. 338-339.

③③ Ibid., p. 253.

③④ R. Martin-Achard, op. cit., p. 301.

③⑤ Francis I. Andersen and David Noel Freedman, Amos the Anchor Bible (New York Doubleday, 1989) p. 393.

③⑥ Ibid., pp. 382-383.

③⑦ A・ヴァイザー 前掲書 二八八頁。

③⑧ A・ヴァイザー 前掲書 二九七頁。

③⑨ A・ヴァイザー 前掲書 二八三頁。

④④ J・リンバーク 有沢僚悦訳『現代聖書注解 ホセア書ーミカ書』（東京・日本基督教団出版局、一九九二年）一五一〜一五二頁。

④① K・コッホ 荒井章三、木幡藤子訳『預言者』へ聖書の研究シリーズく三三三（東京・教文館、一九九〇年）九五〜九六頁。

④② J・リンバーク 前掲書 一五七頁。